

た。これは西洋心理学と東洋的靈性を創造的に融合したものである。そして一九九〇年代に入り、深層心理学と仏教の対話が再び活発になるのである。

○心理学 未我↓自我↓自己↓超(自)我 フロイト、マズロ

ー、ゴールドシュタイン

未意識↓意識↓無意識(個人的無意識、普遍的無意識(集合的無意識) ユング

○仏教 自我(我執)↓無我

【仏教】

【浄土真宗】

・仏教心理学・唯識の心理学 ・浄土心理学(真宗心理学)

・仏教ビハーラ ・真宗ビハーラ

・仏教カウンセリング ・真宗カウンセリング

○仏教(仏道)

・転迷開悟⇨迷いを転じて悟りを開く

解脱 成仏 涅槃 滅度 生死を超える 「煩惱即菩提」

「生死即涅槃」

○浄土真宗の教え

・阿弥陀如来の本願を信じ念仏を称えれば、現生に正定聚に住し、浄土へ往生して仏になる。後生の一大事。

「能発」念喜愛心 不断煩惱即涅槃 「惑染凡夫信心発 証知生死即涅槃」(正信念仏偈)

初期真宗教団の原風景

安藤 章 仁

『三河念仏相承日記』(以下『相承日記』と略称)は、真宗美術の宝庫といわれる三河地方において専修念仏の教えが初めて伝えられた状況と、その後の展開を記した史料で、奥書に貞治三年(一三六四)の年紀が記される。親鸞没後約百年の記録であるが、初期真宗教団の成立過程を伝える現存唯一の古記録として史料価値は高い。小論では『相承日記』の記述から初期真宗教団の原風景、すなわちその特徴を読み解いてみたい。

まず、初期真宗門侶の成立過程について『相承日記』は、「念仏」「法名」「出家」の三段階があったことを伝えている。詳細に関する記述はないが、「念仏」は入信の段階で俗名を用い、「法名」の下付は正式な信徒、「出家」は坊号が下付された道場坊主と考えられる。そして各段階が顕智聖(一二二六―一三二〇)による相伝であることを主張するところに本書の特徴がある。

次に初期真宗教団の構成について「念仏二入ル人数名帳」の記載内容から考えたい。名帳には三十二名の人名が記されるが、その内訳は下級荘官や有力名主層である「監帳」「庄司」「田俵」「渡」「検校」、坊号を持つ出家者、俗名の一般耕作農民、遊君(女性芸能者)である「御前」、名帳外に記載される土豪的領主の「権守」と多様な社会的階層によって構成されている。注目されるのは、名前の下に「二人」と書かれる十二組

第7部会

の夫婦が見受けられることである。全体の三割強にあたり、坊号を持つ出家者にいたっては五人中三人が妻帯者である。また、名帳とは別の個所には親子で帰敬している事例も記されている。ここに初期真宗教団における念仏の広がりの特徴を見ることが出来る。このような構成は三河地方に限られるローカルな現象ではなく、例証として真宗門徒の男女がセットで描かれる絵系図がある。真宗佛光寺派本山に伝来する絵系図には、序題を存覚が書いているから、十四世紀の真宗教団の一形態と見ることが出来る。遊君への教化についても、法然聖人の絵伝に描かれるところで、法然聖人在世時からの浄土宗教団の様相を伝えていると言える。

最後にどのように念仏が弘められたのか、念仏興行の具体的内実について考えてみたい。ここにいる念仏興行とは、現在の真宗寺院が行う布教伝道ではなく、法然、親鸞に先行する念仏の形態を想定する必要がある。それを説明するキーワードが『相承日記』の「聖」「念仏ヲ勧進」「名帳」「高田ヘマイル」の語句である。「聖」「念仏ヲ勧進」「高田ヘマイル」については、勧進聖の主体が鎌倉時代に弥陀信仰と聖徳太子信仰を弘めた善光寺聖であったことを示している。三河地方に中世の聖徳太子信仰を伝える建築、彫刻、絵画、書跡が多数伝わるのは、その証左といえる。「名帳」については、日課念仏を記さないだけで聖徳太子信仰と関係の深い融通念仏の名帳に類似している。そのことから当初行われた念仏は、名帳記載とともに融通念仏、踊り念仏、坂東節といった集団的な念仏詠唱であったと考えられる。そのことは、顕智の兄弟弟子である真正が「大念

仏衆」であったことや、『相承日記』の名帳に白拍子の遊君三名が記載されていることなどからも事実として認められる。また、奥三河に多様な踊り念仏が伝わっていることも傍証となる。では、三河の真宗草創期に行われた集団的な念仏詠唱とは、どんなものであったのであろうか。地域は異なるが、毎年八月四日の顕智忌に如来寺と太子寺（ともに三重県鈴鹿市三日市）を中心に行われる「オンナイ念仏会」（三重県無形民俗文化財）が、原初性を伝えるモデルケースとして参考になる。舞踊がないだけで、集団でおんない念仏和讃を詠唱し、行道するという大念仏の形態をとる民俗的鎮送儀である。三河地方では真宗教義に基づく信仰や美術が確立する中で、原始的大念仏は淘汰され、伝承は途絶えたものと考えられる。

存覚における聖道門理解の一考察

赤井智顕

存覚の聖道門に対する理解、すなわち聖浄帰一論や法華念仏同体論といった主張は、末世聖道門による得道を容認するものであり、親鸞には見られない特徴的なものである。しかし、存覚がこの様な仏教理解を語る背景には当然、存覚自身の「聖道門」そのものに対する捉え方が多分に影響していたものと考えられる。

存覚の著述を窺えば、二通りの聖道門理解が存していたこと